K-1　東松島市宮戸月浜地区　　2011 年 12 月 10 日（土）

報告者名　俵木　悟　　被調査者生年　1964 年（男）
調査者名　俵木　悟　　被調査者属性　飲食業（震災前は海苔養殖業）
補助調査者　大沼　知

自身の境遇と震災後の転身について

話者は石巻から月浜に婿に来た。月浜では海苔養殖と、海の家・売店の経営をしていた。津波で海苔養殖の設備等がすべて流されたため、養殖を続けることを諦め、6 月からラーメン屋台の経営を始めた。震災を機会に復興したい（新しいことをしたい）と思って始めたのだが、今は瓦礫の撤去をしていた方が良かったかとも感じている。屋台の売り上げは、一日 1 万～ 1 万 5 千円程度。そのうち 6 割ほどが利益になるという。

宮戸島には 4 つの浜（区）があり、漁業に関しては宮戸漁協（大浜･室浜）と宮戸西部漁協（里浜・月浜）の 2 つの組織に分かれている。瓦礫の撤去は漁協単位で組織されており、月に 25 万ほどの収入になると聞いているという。

ラーメン屋台を始めた当初は、被災を逃れた自製の海苔を使ったラーメンが売りで、テレビ等でもたびたび報道されたが、今は当初考えていたほど商売が上手くいかないという感が強い。また、これまでの暖かい時期は良かったが、寒くなってくると一日中外での立ち仕事になる屋台は体力的にも厳しいと感じるという。グリーンタウンやもとの仮設住宅には飲食店の店舗が入っていると聞き、自分も同様に仮設住宅に店舗を持たせてもらえないかという希望を市に伝えたが、そのような希望は他にもたくさんあるという。現在は、普段は奥松島縄文村歴史資料館前に屋台を出しており、休日の昼には月浜などの仮設住宅に行って店を開いている。ボランティアの炊き出しがあると売り上げにならないので、その情報を聞いて店を出す場所を考えている。店ののれんは、最近、ボランティアの人たちが作ってくれたという。

海苔養殖を諦めたことについて

震災以前から、海苔養殖はあまり長く続けられないと思っていた。近年は利益も芳しくなかった。事業を拡大するには、新しい乾燥機等の設備投資が必要になるが、個人の事業主では国の補助金などを得るのが難しく、行き詰まりを感じていた。

月浜の海苔養殖業者で共業化する話があるが、これだと通年雇用の給料制になるので、つまらないと感じたという。以前の業態だと、秋から春の間は海苔養殖に従事し、夏の間は海の家を経営するなど、ある程度好きなことができた。震災を機に、共業化の話も本格的になってきたので、これを機会に転身を決めた。月浜の海苔養殖業者で、共業化に参加しないことを決めたのは、話者が唯一である。

しかし新たにラーメン屋台を始めても、同様に個人の事業主には補助金が得られないことを不

満に思っている。補助を受けるためには組合などを作らなければならない。

写真　話者のラーメン屋台の営業の様子